

近代仏教研究は何を問うのか——とくに二〇〇〇年代以降の研究動向を中心に——

大谷 栄一

はじめに

近代仏教研究は何を問うのか。二〇〇〇年代以降の研究動向を振り返りながら、そのことを明らかにしたい。¹⁾

なぜ、二〇〇〇年代以降を対象とするのか。日本の近代仏教研究は、吉田久一『日本近代仏教史研究』（一九五九年）を起点として、本格的にスタートする（この点は後述）。吉田、柏原祐泉、池田英俊らの活躍により、一九六〇～七〇年代半ばに研究の隆盛をみる（これを近代仏教研究の第一のピークと名づけよう）。その後、吉田らの研究が継承され、研究は進展するが、二〇〇〇年代以降、第二のピークというべき研究の高揚期を迎えているのでは

ないか、と筆者は考える。

以下、第二次世界大戦前から戦後の近代仏教研究の軌跡を概観したうえで、二〇〇〇年代以降の研究動向の中から特徴的な研究テーマ群を紹介しながら、近代仏教研究の現状を摘出し、今後の課題を提示したいと思う。

なお、本論では紙幅の制約と筆者の能力の限界もあり、二〇〇〇年代以降の研究すべてを網羅することはできず、あくまでも筆者個人からみた研究動向のレビューであることと、研究成果の数が多いため、単行本化された成果を中心に取り上げたことをお断りしておく。

一、第二次世界大戦前の研究

——研究対象としての「明治仏教」

日本の「近代仏教 (Modern Buddhism)」は、明治維新时期 (二六八年) から、第二次世界大戦の終戦 (二九四五年) までの時期における仏教の近代的形態を意味する。⁽²⁾ ただし、その指し示す範囲は広いため、筆者は日本の近代仏教を、①浄土真宗や日蓮宗のような伝統仏教、②本門佛立講 (現・本門佛立宗)、霊友会、創価学会のような仏教系新宗教、③葬送儀礼や踊り念仏のような民俗仏教、④清沢満之の精神主義、境野黄洋や高嶋米峰らの新仏教運動に象徴される仏教改革運動に大別する。

では、日本の近代仏教研究 (日本近代仏教史研究) の始まりはいつからであろうか。ここで、林淳の指摘に注目したい。

近代仏教研究の始まりは、戦後のものである。戦前には「明治仏教」と称されてきた研究対象が、「近代仏教」と捉えなおされたのであった。単に言葉が言い換えられただけではなかった。日本人が、明治維新から敗戦までの時代を、ひとまとまりの時代像として把握できたのは、第二次世界大戦の敗戦体験を必要とした。⁽³⁾

林が述べるように、その本格的な始まりは、第二次世界大戦後である。ただし、戦前に研究が行われなかったわけではない。その研究対象は「近代仏教」ではなく、「明治仏教」と称されてきたのである。戦前における明治仏教研究の嚆矢は、高地大等の「明治宗教史 (基督教及佛教)」 (『解放』大正一〇年一〇月号) である。その後、羽根田文明『維新前後仏教遭難史論』 (一九二五年)、辻善之助・村上専精・鷺尾順敬編『明治維新神仏分離史料』全五卷 (一九二六―一九二九年)、徳重浅吉『維新政治宗教史研究』 (一九三五年)、圭室諦成『明治維新廢仏毀釈』 (一九三九年)、土屋詮教『明治仏教史』 (一九三九年) 等によって、明治仏教の研究は進展した。⁽⁴⁾ そこでの研究の中心は、先の区分に従えば、①伝統仏教と③民俗仏教であった。

その研究の特徴は、一定の歴史観に依拠して、「明治仏教」を記述するのではなく、幕末・明治維新以降の仏教の動向を当時の政治的・社会的背景を踏まえて、年代的に記述するというスタイルであった。

二、第二次世界大戦後の研究

——「明治仏教」から「近代仏教」へ

じつは、戦前の明治仏教中心主義というべき傾向は、

戦後の研究にも継承されている（たとえば、一九四六年に辻善之助の『明治仏教史の問題』が刊行された）。近代仏教史Ⅱ『明治仏教史』という図式の下で、戦前から現在まで「明治仏教」に関する研究が積み重ねられてきたのである。ただし、その呼称として戦後に「近代仏教」が用いられるようになったのである。

戦後の近代仏教研究の出発点となったのが、吉田久一『日本近代仏教史研究』（一九五九年）である。吉田は次のようにいう。

私がここで報告する内容は、明治仏教の諸問題ではあるが、特に日本近代仏教史と名付けたのは、近代史の角度で明治仏教を考えようとしたからで、近代史上問題点を提供するテーマに焦点を当て、近代仏教全体の位置を考察しようとしたのである。（序三頁）

その後、一九六〇～七〇年代半ばにかけて、法蔵館編集部編『講座近代仏教』全六巻（一九六一～六三年）、吉田『日本近代仏教社会史研究』（一九六四年）、柏原祐泉『日本近世近代仏教史の研究』（一九六九年）、池田英俊『明治の新仏教運動』（一九七六年）等の成果が発表された。また、吉田の編集によって、近代仏教のアンソロジー（『現代日本思想大系7 仏教』一九六五年と『明治文学全集87 明

治宗教文学集（一）一九六九年）も刊行された。

この時期を、日本の近代仏教研究の第一のピークと規定しておきたい。これらの研究の対象は戦前と同じく、「明治仏教」が主であり、明治仏教研究が近代仏教研究の中心だった。ただし、その対象は①伝統仏教と③民俗仏教から、①伝統仏教と④仏教改革運動に比重が移り、とくに④に焦点が当てられるようになった。また、記述方法も変化した。戦前のように、年代記的に記述するスタイルから、近代的な価値観を重視する近代主義的な記述のスタイルに変わった。その背景にあったのは——林が指摘するように——第二次世界大戦の敗戦体験だった。敗戦を経て、日本社会の近代化を求める風潮がアカデミズムにも顕著であり、それが近代仏教研究にも反映したのである。

こうした近代主義的な姿勢は、吉田の研究に顕著である。吉田は、二〇世紀初頭の清沢満之の精神主義と境野黄洋、高嶋米峰らの新仏教運動を近代仏教成立の指標と評価する。個人の内面的信仰（精神主義）と公共空間での社会活動（新仏教運動）を、日本仏教の近代化の基準として捉えたのである。吉田の学問的な背景として、講座派歴史学、大塚久雄、丸山真男という戦後の社会科学の成果を貪欲に取り込んだ点にあることを指摘するのは、

林淳である。^⑥ 林によれば、「封建制と近代という二項対立の認識を仏教史研究の上で引き受け、仏教の近代化を夢見たことによって、吉田の著作は、戦後の学問史に正当な位置を占めることができた」のである。^⑦

このように仏教の近代化を重要視し、精神主義や新仏教運動のような仏教改革運動を近代仏教のモデルの核心とする研究パラダイムを——碧海寿広の言葉を借りて——「改革パラダイム」と呼んでおこう。^⑧ この改革パラダイムが対象化され、相対化されるのが二〇〇〇年代以降の近代仏教研究の重要な特徴となる。

なお、吉田、柏原、池田らの研究は日本の近代仏教研究の基準となり、一九八〇年代以降も継承されていった。八〇〜九〇年代にかけての成果をみると、扱われる時期が「明治」から「大正」「昭和」に広がり、九〇年代には柏原の『日本仏教史 近代』（一九九〇年）と吉田の『近代仏教の歴史』（一九九八年）という通史も刊行された。また、小島勝・木場明志編『アジアの開教と教育』（一九九二年）にみられるように、アジアへの問題関心も提起された。^⑨ さらに、芹川博通『近代化の仏教思想』（一九八九年）のように、仏教の近代化を主題とする研究も登場し、近代仏教研究の深まりを確認することができる。^⑩

三、二〇〇〇年代以降の研究

(一) 研究動向の特徴

二〇〇〇年代以降、日本の近代仏教研究は第二のピークというべき時期を迎える。新たな研究視点が提示され、研究テーマや対象も広がりをみせた。また、若手研究者の参入もあり、研究者の数が増え、近代仏教を主題とする研究書の刊行も年々、増加している。さらには——吉永進一が指摘するように——「国際的、学際的研究の広がり」^⑪も研究の活性化を支えている要因であろう。

まず、二〇〇〇年代以降の近代仏教研究の活性化の起爆剤となったのが、末木文美士の研究である。周知の通り、末木はもともと古代・中世仏教の研究者だが、現在では広く日本仏教史全体を総覧する成果を発表している。その末木が編集を担当したのが、雑誌『思想』九四三号「特集 仏教／近代／アジア」（岩波書店、二〇〇二年）である。特集全体を通じて、仏教思想が日本の近代化の中で果たした多面的な役割が検証され、日本近代思想史の再考が試みられた。とくにアジアとの関係に重点が置かれ、トランスナショナルな視点が打ち出されている。ここでの問題意識は、末木の『明治思想家論——近代日本の思

想・再考Ⅰ』、『近代日本の仏教——近代日本の思想・再

考Ⅱ』(二〇〇四年)にも引き継がれた。「個と個を越えるもの」という視点から、明治(仏教)思想の特徴が捉え直された。こうした明治の二元論は、吉田らの近代主義的な視点を相対化するものである。以上のような末木の問題意識や視点がその後の近代仏教研究に影響を与えた。

また、二〇〇〇年代以降の研究の活性化に貢献したのが、若手研究者たちの博士論文の出版である。筆者、守屋友江、陳継東、福島榮寿、小川原正道、谷川穰、川瀬貴也、高本康子、山本伸裕、オリオン・クラウタウ、新堀敏乃、近藤俊太郎、川辺雄大、新野和暢、碧海寿広等の単著の刊行によって、研究の裾野が広がりつつある。

くわえて、(二〇〇〇年代以前の作品もあるが)ジェームス・ケテラー (James E. Keetlar)⁽¹⁴⁾、ブライアン・ヴィクトリア (Brian A. Victoria)⁽¹⁵⁾、リチャード・ジャフィ (Richard M. Jaffe)⁽¹⁶⁾、ジュディス・スノドグラス (Judith Snodgrass)⁽¹⁷⁾、クリストファー・アイヴス (Christopher Ives)⁽¹⁷⁾ 等、海外の研究者による日本の近代仏教に関する成果や新たな視点ももたらされている。

(二)近代仏教史のメタヒストリー

では、二〇〇〇年代以降の研究における特徴的な研究

テーマ群を紹介しよう。

まず、近代仏教史のメタヒストリーというべき研究の流れである。吉田久一によって定礎された「改革パラダイム」の対象化・相対化は、「近代仏教史研究のナラティブ」(福島榮寿)⁽¹⁸⁾の再検討によって着手された。福島は、キャロル・グラックやヘルマン・オームスらの研究を参照しつつ、思想史的方法論的立場から、近代日本の仏教や宗教を批判的に捉え直すことを提起している。また、「歴史記述のメタレベルの問題」を対象化し、「歴史記述の言説性」を問うことを試みている。⁽¹⁹⁾

筆者は福島の問題意識を継承し、また、磯前順一の宗教概念論(『近代日本の宗教言説とその系譜——宗教・国家・神道』二〇〇三年等)を参照し、従来の近代仏教をめぐる物語を対象化し、相対化することを提起した。吉田ら「近代仏教研究の開拓者たちの「仏教」観は西洋プロテスタントイイズム由来のピリーフ(概念化された信念体系)重視の「宗教」観にねざしており、そうした「仏教」観を内在化した近代主義的なスタイルによって、前近代の仏法が「近代仏教になる」という物語を描いてきた。吉田らが示した仏教の近代化の基準や近代化の捉え方自体に限界があることを指摘した。

この研究領域を大幅に更新したのが、オリオン・クラ

ウタウの『近代日本思想としての仏教史学』（二〇一二年）である。本書は、「仏教史学の『史学史』の試み」と評価されており、近現代日本のアカデミズム仏教（史）学において「日本仏教」という「大きな物語 brand narrative」がどのように構築されたのかを詳細に明らかにした。クラウタウは、サイドのオリエンタリズム批判以降の欧米における「仏教」研究と二〇〇〇年代以降の日本の近代仏教研究を踏まえ、「鎌倉仏教中心史観」と「近世仏教墮落論」という日本仏教史学における二大パラダイム（にもとづく「日本仏教」）の形成過程を分析し、官学アカデミズムの知識人たちの「歴史記述の言説性」を鋭利に問い直している。

③学知と仏教

クラウタウが示したように、仏教学や仏教史学などの学知も近代仏教研究の重要なテーマである。そうした学知と仏教の関係は、ほかにも末木文美士「アカデミズム仏教学の展開と問題点」（『近代日本と仏教』）、林淳「近代日本における仏教学と宗教学」（『宗教学研究』三三三三号、二〇〇二年）、同「近代仏教と学知」（末木・林・大谷・吉永編『ブッダの変貌——交錯する近代仏教』二〇一四年）、岡田正彦『忘れられた仏教天文学——十九世紀の日本における仏

教世界像』（二〇一〇年）、江島尚俊・三浦周・松野智章編『近代日本の大学と宗教』（二〇一四年）等により、研究が着実に進んでいる。

仏教学と宗教学が大学制度の整備とともに形成されたことが林によって指摘され、江島らの研究では東京帝大、京都帝大、宗門系大学での宗教やキリスト教、仏教の研究や教育について詳述されている。

④近代真宗史

近世仏教における真宗の位置づけは近世宗教史研究の重要な課題であるが、「近代仏教研究者にとつても真宗はまた問題となっている」²²。近代の仏教界や官学アカデミズムを先導してきたのが真宗であることは多くの研究者たちによってすでに指摘されており、柏原祐泉や福嶋寛隆の研究をはじめ、その数も多い。いわば、近代仏教における真宗問題というべき問題系をなしている。

二〇〇〇年代以降の研究をみても、近代真宗史に関する研究は他の宗派にくらべて抜きんでている。たとえば、広く近代真宗史を通覧した成果として、柏原祐泉『真宗史仏教史の研究Ⅲ 近代編』（二〇〇〇年）、福嶋寛隆『歴史のなかの真宗——自律から従属へ』（二〇〇九年）、水島見一『近・現代真宗教学史研究序説』（二〇一〇年）、

安富信哉『シリーズ親鸞 第九卷 近代日本と親鸞——信の再生』(二〇一〇年)等がある。

これらの研究でも取り上げられているが、浄土真宗本願寺派の島地黙雷と真宗大谷派の清沢満之とその門下の思想と活動の研究は、戦後の近代仏教研究のメインストリームを形成してきた。単行本化された成果だけでも、島地黙雷については川村覚昭『島地黙雷の教育思想研究——明治維新と異文化理解』(二〇〇四年)、山口輝臣『島地黙雷——「政教分離」をもたらした僧侶』(二〇一三年)がある。また、清沢満之とその門下の研究は、福島栄寿『精神主義』の求道者たち——清沢満之と暁鳥敏』(二〇〇三年)、同『思想史としての「精神主義」』(二〇〇三年)、今村仁司『清沢満之の思想』(二〇〇三年)、同『清沢満之と哲学』(二〇〇四年)、山本伸裕『精神主義』は誰の思想か?』(二〇一一年)、近藤俊太郎『天皇制国家と「精神主義」』(二〇一三年)等、その成果は多い(真宗の海外布教史の成果は次項で紹介)。

つまり、清沢とその門下の思想や動向を扱った研究が近代真宗史研究の中心をなしている。それに対して、(次項で紹介するように)本願寺派の大谷光瑞に関する研究が近年、急速に進んでおり、また、大谷派の学僧である近角常観に関する成果として、碧海寿広『近代仏教のな

かの真宗——近角常観と求道者たち』(二〇一四年)と岩田文昭『近代仏教と青年——近角常観とその時代』(二〇一四年)が最近、刊行された。これらの研究は、近代真宗史(と近代仏教史)に関する新たな問題提起をしている。

(五)近代仏教のトランスナショナル・ヒストリー

筆者は、以前、従来の研究にみられる「ナショナル・ヒストリーとしての日本近代仏教史」から、「トランスナショナル・ヒストリーとしての近代仏教史」へと、近代仏教史を語り直すことを提起した²⁴。ここでは、近代仏教のトランスナショナル・ヒストリー研究として位置づけることができる成果を紹介してみたい。

そもそも国境を越えた日本の仏教者や仏教団体の活動に関する研究は、①伝統教団の海外布教(ハワイや南北アメリカ大陸、アジア)、②仏教系新宗教(新宗教)の海外布教(アジア、ハワイや南北アメリカ大陸)、③仏教者や仏教学者の海外渡航(欧米、アジア)、④仏教学者の「文化工作」(アジア)の研究に大別することができる、いずれの領域も二〇〇〇年代以降、研究がとくに活発化している²⁵。ここでは、①と③のみを取り上げる。

①伝統教団の海外布教については、ハワイに渡った浄

土真宗本願寺派の開教使・今村恵猛を論じた守屋友江『アメリカ仏教の誕生——二〇世紀初頭における日系宗教の文化変容』(二〇〇一年)、ハワイの日系仏教を扱った高橋典史『移民、宗教、故国——近現代ハワイにおける日系宗教の経験』(二〇一四年)、ハワイ・北米・南米の開教史をまとめた中西直樹『仏教海外開教史の研究』(二〇一二年)がある。アジア布教については、木場明志・程舒偉編『日中両国の視点から語る 植民地期満洲の宗教』(二〇〇七年)、諸点淑『東アジア植民地における日本宗教の「近代」——植民地朝鮮における日本仏教の社会事業を中心として』(立命館大学大学院文学研究科史学専攻二〇〇七年博士論文)、川瀬貴也『植民地朝鮮の宗教と学知——帝国日本の眼差しへの構築』(二〇〇九年)、中西直樹『植民地朝鮮と日本仏教』(二〇一三年)、川辺雄大『東本願寺中国布教の研究』(二〇一三年)、磯前順一・十尹海東編『植民地朝鮮と宗教——帝国史・国家神道・固有信仰』(二〇一三年)、新野和暢『皇道仏教と大陸布教』(二〇一四年)、吉永進一『以て非なる他者——近代仏教史における神智学』(前掲『ブッダの変貌』(二〇一四年)等がある。

また、③の研究として、一八九三年にシカゴで開催された万国宗教大会に参加した日本仏教者を扱った前述の

ジェームス・ケテラーやジュディス・スノドグラスの研究、日本仏教者の南インド渡航を扱ったリチャード・ジャフイ『釈尊を探して——近代日本仏教の誕生と世界旅行』(前川健一訳、『思想』九四三号、二〇〇二年)、日本と南アジア諸地域の仏教者たちの交流を考察した佐藤哲朗『大アジア思想活劇——仏教が結んだ、もうひとつの近代史』(二〇〇八年)、チベットに渡った僧侶たちの旅行記等を分析した高本康子『近代日本におけるチベット像の形成と展開』(二〇一〇年)、仏教者たちのアジア経験を論じた小川原正道編『近代日本の仏教者——アジア体験と思想の変容』(二〇一〇年)等がある。さらには、大谷探検隊を組織した大谷光瑞については、柴田幹夫編『大谷光瑞とアジア——知られざるアジア主義者の軌跡』(二〇一〇年)や白須浄真『大谷探検隊研究の新たな地平——アジア広域調査活動と外務省外交記録』(二〇一二年)等の研究があり、大谷光瑞研究を牽引してきた柴田の成果は、『大谷光瑞の研究——アジア広域における諸活動』(二〇一四年)としてまとめられた。

なお、ここでは東アジアとの関係に注目すると、日本の近代仏教は当時の歴史的・国際的文脈の中で戦争と植民地化を通じて、東アジア世界に介入した。ここで、植民地主義の問題が前景化し、トランスナショナル・ヒス

トリイ的な「帝国と仏教」研究が招来される²⁷。先に紹介した諸、川瀬、磯前+尹らの朝鮮の仏教(宗教)に関する研究は、いずれもトランスナショナルな帝国史的研究として位置づけることができるが、このうち、植民地朝鮮における日本仏教(真宗大谷派、浄土宗)の社会事業を分析した諸は、日本の近代仏教の近代性が植民地主義的なものであったことを摘出し、それを「植民地的近代(colonial modernity)」と表現している。こうしたネガティブな近代性の指摘は、従来の近代仏教研究にはみられなかったものである。

(六)近代仏教と戦争

植民地主義の問題と密接に関連する戦争との関係については、市川白弦『仏教者の戦争責任』(一九七〇年)や中濃教篤編『講座日本近代と仏教6 戦時下の仏教』(一九七七年)の先駆的な研究以降、研究の数は多くないものの、一定の蓄積がある。とくに、二〇〇一年に日本語訳が刊行されたブライアン・ヴィクトリアの『禅と戦争——禅仏教は戦争に協力したか』は国内外に大きな反響を呼んだ。

その後、二〇〇〇年代には、坂本慎一『ラジオの戦争責任』(二〇〇八年)、前述のクリストファー・アイヴス

の研究、小川原正道『近代日本の戦争と宗教』(二〇一〇年)、同『日本の戦争と宗教1899-1945』(二〇一四年)、新野和暢『皇道仏教と大陸布教』(二〇一四年)等の成果が刊行されている。とくに新野の研究は、(市川、中濃編、ヴィクトリアの研究で言及されていたもの)主題化されることとかなかった「皇道仏教」を正面から取り上げた成果であり、その意義は大きい。

(七)国家と仏教

二〇〇〇年に近現代仏教史の研究と諸主題を整理した孝本貢は、近代仏教史研究の主題として、「国家と宗教」と「仏教教団の「近代的再組織化」というふたつの課題を指摘している²⁸。前者は、吉田の『日本近代仏教史研究』(一九五九年)以来の基本テーマである。筆者は、『近代日本の日蓮主義運動』(二〇〇一年)で「国家と日蓮主義」の関係を問い直し、「ナショナルリズムと仏教」「超国家主義と仏教」についても検討した(『近代仏教という視点』二〇一二年)。近年では、近藤俊太郎が「国家と精神主義」の関係を再検討している(前掲『天皇制国家と「精神主義」』)。

なお、林は、従来の研究が国家の存在を自明視し、「制度的な精査をなござりにした」として、「国家と仏

教団の關係の構築過程を精査すべき」と提案する³⁰。これに関連して、林は別の論文で「近代仏教研究は、制度的な基礎研究に欠ける点で、国家神道研究に後れをとっている³⁰」と述べており、この論点は、孝本のいう「仏教団の「近代的再組織化」の課題に接続する。近代伝統教団の制度史分析については、森岡清美『真宗教団と「家」制度』（一九六二年）、平野武『西本願寺法と「立憲主義」——近代日本の国家形成と宗教組織』（一九八八年）、羽賀祥二『明治維新と宗教』（一九九四年）のような重厚な先行研究があるものの、二〇〇〇年代以降、研究は進んでいない。ただし、明治政府の宗教行政を取り扱った小川原正道『大教院の研究——明治初期宗教行政の展開と挫折』（二〇〇四年）、政府の教化政策、教育制度と仏教者、仏教団の関わりを論じた谷川雅『明治前期の教育・教化・仏教』（二〇〇八年）は、この研究領域の間隙を埋める成果である。

おわりに

以上、戦前から戦後の近代仏教研究史を概観し、二〇〇〇年代以降の近代仏教研究における特徴的なテーマ群を紹介しつつ、それらの研究領域で何が問われているの

かを検討した。従来の先行研究を継承しているテーマもあれば、新たに開拓されたテーマがあることが確認できた。ほかにも、神仏分離・廃仏毀釈、「国家神道」、肉食妻帯、仏教社会事業、慰霊・追悼、仏教音楽、仏教メディア、他宗教との関係等々、紹介すべきテーマは多い。また、近代仏教研究としては成果の少ない仏教系新宗教や民俗仏教の研究にも取り組み、これらを専門とする新宗教研究者や民俗学者との研究上の連携や交流も必要であろう。くわえて、日本にとどまらず、世界各地の近代仏教と日本の近代仏教との国際比較も欠かせない。その意味では、吉永のいう「国際的、学際的研究」をなす一層、進めていくことが近代仏教研究のさらなる発展のために求められている。

現在、近代仏教研究はパラダイム・シフトの最中にある。「改革パラダイム」に代わる「大きな物語」が示されているわけではない（末木の「明治の二元論」も明治期に限定されたものである）。今日の近代仏教研究を基底で支えている問いは、（戦後の近代仏教研究で問われ続けてきた）仏教の近代化をめぐる問い、すなわち、「仏教の近代化とは何か？」であろう³¹。吉田らによって示された仏教の近代化の基準や近代化の捉え方を批判的に継承しつつ、どのように先行研究を乗り越えていくか。それが問われて

いる。たとえば、日本仏教の近代性は、これまでそのポジティブな面が強調されてきたが、帝国主義や植民地主義というネガティブな面も問い直す必要がある。「多種多様な近代」(チャールズ・テイラー)が語られる現在、帝国主義近代や植民地近代などの近代概念も十分に踏まえつつ、「近代仏教」を語り直すこと。つまり、近代批判としての近代仏教研究の展開によって、仏教の近代化をめぐる問いを深め、新たなパラダイムを眺望することができるのではないかと筆者は考へる。

注

(1) 筆者はすでに近代仏教研究の研究史について、「近代仏教になる」という物語——近代日本仏教史研究の批判的継承のための理路」(『近代仏教』一六号、二〇〇九年、のちに拙著『近代仏教という視座——戦争・アジア・社会主義』ぺりかん社、二〇一二年に所収)、「近代仏教史研究の現状と課題」(『近代仏教』一八号、二〇一一年)、「Editors' Introduction: Studies on Modern Buddhism in Contemporary Japan」(Hayashi Makoto, Orani Eichi, and Paul L. Swanson, eds., *Modern Buddhism in Japan*, Nanzan Institute for Religion and Culture, 2014)を発表しており(三本目はHayashi, Swansonとの共著)、本論の内容の一部はこれらの拙論と重なる。

(2) 第二次世界大戦後の仏教も含めて「近代仏教」と表現する研究者もいるが、本論では戦後の仏教を「現代仏教」、明治維新时期から現代までの仏教を「近現代仏教」と規定しておく。

(3) 「近代仏教と国家神道——研究史の素描と問題点の整理」(『禅研究所紀要』三四号、二〇〇六年)、八七頁。

(4) ただし、土屋詮教の『大正仏教史』(三省堂、一九四〇年)や『明治・大正・昭和時代仏教史』全二巻(仏教年鑑社、一九三三―三四年)、増谷文雄『近代仏教思想史』(三省堂、一九四一年)もあり、明治仏教以外の研究もあった。とくに増谷の著作は、戦後の吉田に先駆けて、「近代仏教」を書名に冠した貴重な研究である。

(5) 『日本近代仏教史研究』(吉川弘文館、一九五九年)、三五五頁。

(6) 「近代仏教の時期区分」(『季刊日本思想史』七五号、ぺりかん社、二〇〇九年)、六頁。

(7) 同前、六―七頁。

(8) 『近代仏教のなかの真宗——近角常観と求道者たち』(法蔵館、二〇一四年)、五頁。

(9) なお、本書に先立ち、中国大陸と朝鮮への日本仏教の「布教伝道」を検討した研究として、中濃教篤『天皇制国家と植民地伝道』(国書刊行会、一九七六年)が

- ある。
- (10) その詳細は、拙著前掲『近代仏教という視座』、二二七頁参照。
- (11) 『近代仏教史研究の展望』（『中外日報』二〇一二年六月三〇日号）、五面。
- (12) 『近代日本の仏教』（トランスビュー、二〇〇四年）、七頁。
- (13) *Of Heretics and Martyrs in Meiji Japan: Buddhism and Its Persecution*, Princeton: Princeton University Press, 1989.（＝岡田正彦訳『邪教／殉教の明治——廃仏毀釈と近代仏教』、へりかん社、二〇〇六年）
- (14) *Zen at War*, New York: Weatherhill, 1997.（＝エイミー・ルイーズ・ツジモト訳『禅と戦争——禅仏教は戦争に協力したか』、光人社、二〇〇一年）
- (15) *Neither Monk nor Layman: Clerical Marriage in Modern Japanese Buddhism*, Honolulu: University of Hawai'i Press, 2001.
- (16) *Presenting Japanese Buddhism to the West: Orientalism, Occidentalism, and the Columbian Exposition*, Chapel Hill: University of North Carolina Press, 2003.
- (17) *Imperial Way Zen: Ichikawa Hakugen's Critique and Lingering Questions for Buddhist Ethics*, Honolulu: University of Hawai'i Press, 2009.
- (18) 『思想史としての「精神主義」』（法蔵館、二〇〇三年）、九頁。
- (19) 同前、一五頁。
- (20) 前掲『近代仏教という視座』、二九～三〇頁。
- (21) 福島栄寿「書評 オリオン・クラウタウ著『近代日本思想としての仏教史学』（『日本思想史学』四五号、二〇一三年）、二四三頁。
- (22) 引野亨輔『近世宗教世界における普遍と特殊——真宗信仰を素材として』（法蔵館、二〇〇七年）、上野大輔「日本近世仏教論の諸課題——宗教社会史の視座より」（『新しい歴史学のために』二七三号、二〇〇九年）参照。
- (23) オリオン・クラウタウ「趣旨説明」（『日本思想史学』四三号、二〇一〇年度大会パネルセッション3『近代仏教と真宗の問題』二〇一一年）、三六頁。
- (24) 『帝国と仏教』（『日本思想史学』四三号、二〇一一年）ならびに「アジアにおける「仏教と近代」」（末木・林・吉永・大谷編『ブッダの変貌——交錯する近代仏教』法蔵館、二〇一四年）参照。
- (25) その研究動向については、藤井健志「仏教者の海外進出」（末木文美士編『新アジア仏教史14 日本IV 近代国家と仏教』佼成出版社、二〇一一年）に詳し。
- (26) 前掲『近代仏教という視座』、一七七頁。

- (27) 前掲「帝国と仏教」、一五頁。
- (28) 「近現代」(日本仏教研究会編『日本仏教の研究法——歴史と展望』法蔵館、二〇〇〇年)。
- (29) 前掲「近代仏教の時期区分」、一二頁。
- (30) 前掲「近代仏教と国家神道」、八九頁。
- (31) さらに大きな問いとして、いわゆるウエーバー・テーゼを適用した「日本の近代化と仏教」の問題系がある。これについては、機会をあらためて論じること
にしたい。
- (32) 拙論前掲「アジアにおける「仏教と近代」」(末木・林・吉永・大谷編『ブツダの変貌』、一三二六頁)。

(佛教大学准教授)